

はじめに

本書のねらい

社会のメンバーとして生きる私たちは、メンバーとしての権利を有しておりそれを基盤として社会生活を営んでいます。したがって、この社会生活を送っていくためには、社会のメンバーとしての自身の権利を侵害されないこと、そして他者の権利を侵害しないことを、メンバーの基礎的な能力として身につけなければなりません。

しかし、残念ながら現代社会において、権利侵害はさまざまな形で生じています。また、権利を権利として認識していないがゆえに、現在進行形で生じている権利侵害を認識しえないことも少なくありません。その結果、人として当たり前の権利すら奪われることも多くあるのです。

大学教員である私たちが、これから本格的に社会参画していく大学生のみなさんに必要だと考えるのは、この権利（侵害）についての知識です。権利（侵害）についての知識を豊かにすることで、自分らしく生きていくことや、他者とともにによりよく生きていくことができるかと私たちは考えています。

では、権利（侵害）はどのように学ぶことができるのか。1つは、権利について学び、そのうえでその侵害のあり方をみていくという方法。そして、もう1つはその侵害について学ぶことで、権利のあり方をみていくという方法です。

本書がとるのは後者の方法です。権利侵害の中心としての差別・抑圧をテーマにすえ、それを「ひもとく」ことを通して、みなさんにこの社会のメンバーとして必須の能力＝権利を侵害されない・権利を侵害しないという能力の基本を身につけてほしいと考えています。

本書の特徴

現代社会における差別・抑圧を多面的・総合的にみていくのが、本書の特徴です。世代も専門領域も異なる13人の研究者が、それぞれの専門分野の知見や立場を持ち寄り、ときには議論を戦わせながら、現代社会における差別・抑圧

について真剣に考えて本書をつくりました。書き手の知見や立場の違いもあるため文章に個性や違いも多々ありますが、むしろそれが社会の多様性を重視する本書の趣旨にもあっていると考えています。そのあたりの違いも比較しながら、大学生のみなさんが自分なりの差別・抑圧についての考えを、そしてさらには権利についての考えを磨いていってほしいというのが、私たちの思いです。

本書の構成と読み方

差別・抑圧を多面的にみていくにあたって、本書は4部構成をとっています。差別・抑圧の主体・客体として身近な「青年」について扱う第1部からはじまり、差別・抑圧の種類・分類として第2部「貧困・高齢者・病」、第3部「性」を学びながら、最後にもう一度差別・抑圧の客体としての第4部「多文化共生」を扱う構成にしています。身近な問題から読み進めるなかで、最終的に他者の問題として扱いがちな問題も自分たちの問題として受け取っていくことを、構成のねらいとしています。各章は独立しているので興味・関心があるところから読んでもらってかまいません。

なお、本書ではテーマの必要性に応じて差別・抑圧の具体的な事例も扱っています。それらを目にすることで、読者のなかにはショックを受けたり、不快な思いをしたりする人もいるかもしれません。そうした場合は、無理をしない形で読んでいただけたらと思います。

また、私たちは本書を差別・抑圧を考える入門的な本として位置づけています。そのため、各章で扱うテーマについての本格的な検討については、各章の末尾に📖 **読書案内**をつけたので、それらを参考にして学びを深めてほしいと思います。

著者を代表して 植上 一希